

郭公

松宮ゆた

まつとしも今日はなけれどほととぎす

野にも山にも鳴き渡るかな

夏草

森岡たけ子

野はなへてふみわけかたくなりけり

すゝき高かやしけりわひつゝ

晝顔

槻尾董子

てりつゝき山田の水のみなつきに

露を含みてゑめるひる顔

夏草

林節子

朝なくおく白露のすゝしさに

かりもはらはぬ庭の夏草

いかなる折にか

池田みぎは

若葉しけるなかに家あり世の中の

あつけさしらして誰かすむらん

無題

秋

影

妻とらば琴ひくをとめ家買は、

銀杏ある家をとのぞましと思ふ

納涼

東くめ

晝間の暑さの

なごり見せて、

炎そもえたつ

ゆふべの雲に、

くれなぬそめなす

いる日のかけ、

波間に落つるや

おさも暮れぬ、

* * * * *

熾けたる真砂路

いつか冷えて

夕風すゝしく

渡る磯を

ものすそかゝけて

友とゆけば

よせくる白波

足をおそふ

* * * * *

納涼に來しかひ
わりそ海の

浪にもたわむれ
月にうたひ

更け行く夜さへ
忘れはてゝ

遊ぶもたのしや
夏のうみべ

歸省
小てふ

學ひの庭の
こゝろみも

果てなはいさや
かへらなん

我家の門の
松ひととき

母の手かひの
にはとりも

思へはなつかし
我かふるさと

* * * * *

妹もことしは
七ツなり

みやげに買ひし
この繪草紙

姉様さりとて
それもちて

小をとりしつゝ
よろこはん

あゝたのしわれ
いさやいなん

思へはなつかし
我か故郷

* * * * *

東風吹き入るゝ
窓のもと

妹と共に
姉様を

軒端の鈴を
きゝながら

母か好める
小説を

よむもたのしゝ
きくもたのし

思へはなつかし
我か故郷

* * * * *

ほとゝきす
田島ます

たちばなかをる夕まくれ、軒の玉水音たえて

ななめ淋しきわがやどに、山鶉なるなり